昭和三十一年に於ける国語学界の展望

語彙・意味

塚原鉄雄

語彙論は、音韻論、文法論と対立させられる研究部門のひとつであるが、意味論は、これら三つの部門を纏めた、いわば形態論に、対立するものであろう。語彙論と意味論とが、共に一括して展望されるのは、おかしいといえる。だが、この二つの領域は、研究が、もっとも遅れている。これらの研究は、二十世紀後半における、重要な課題である。さまざまな研究が、いろいろな立場から、今後、試みられ、何が、どう、究明されねばならないか、これから明らかにされるべき、黎明期の段階にある。また、語彙の沿革を辿るうえに、意味論的な考察を、欠くことはできないし、語彙の展開が、意味変化に与える影響も大きい。音韻論や文法論に比して、語彙論は、意味論と、最も深い交渉を持つ。その意味で、この二つが、一緒に展望されることも、無意味ではない。

もっとも、そうした交渉を追求する研究業績が、現実に、認められるというのではない。フランス語を対象とする、岸本通夫氏と堀井令以知氏との共編になる『語と意味』（フランス語学文庫・二）や、一般を対象として、外来語に中心をおく、日本放送協会の『ことばの生い立ち』などから、そのつもりで読めば、示唆を受け得るといった状態に過ぎぬ。だが、この問題は、国語の具体相において、究明されるべき重要性があろう。なお、前者は、Ullman の Précis de sémantique française によるところがあるそうで、かれのことは、堀井令以知氏の紹介が、『言語研究』（第二九号）にある。

また、意味論的考察は、意味を把握する《解釈》にも、深い関連がある。ここでは、そういった面へも及ぼして、展望したい。

語彙の研究において、まず挙げなくてはならないのは、大野晋氏の『基本語彙に関する二三の研究――日本の古典文学作品に於ける――』（国語学第二四集）である。万葉集、枕草子、源氏物語、徒然草を中心資料とし、土佐日記、竹取物語、紫式部日記、讃岐典侍日記、方丈記を補助資料として、各作品の語彙数、共通語を調査し、更に、ジャンルと年代とによる、品詞の比率の様態を探っている。大野氏自身も指摘されるごとく、ほかにも採りあげられるべき作品があり、また、語彙の頻度数を検討しなければ、その実態を把みにくいといった、いわば望蜀の注文はつけられるにしても、未開拓の新しい分野に、最初の鍬を入れた意義は、特記されねばならぬ。

こういう研究が、実際化し得るようになったのも、基礎的な資料が、漸次、共有化されて来たからである。ただ、その場合、対

比参照されるべき資料として、重要な意義を持つ訓点語関係の資料が、専攻者以外には、利用できないのが、頗る遺憾である。これは、訓点語研究の一般的傾向が、本文の読解――それだけでも、なかなか厄介な仕事に相違ないとしても――に煩わされ、語学的研究が、訓点語以外の体系に依存し過ぎていたところに、大きな原因がある。訓点語の研究が、非訓点語との関連においてなされるべきは、いうまでもない。だが、それは、非訓点語を対象として樹てられた体系によって、訓点語に認められる現象を、整理することではない。まして、非訓点語と比較して、訓点語に特有の語彙だけを採りあげたり、または、非訓点語で実証できない現代語の語彙を、訓点語のなかに発見して、その源流を指摘するといったことではない。久しい間、訓点資料の研究は、それ自体の体系や位置づけを看過して、好奇的な興味の対象とされる傾向が、随分と強かった。それでも、仮名字体については、資料ごとに、よく整理されているけれども、語彙については、この域を脱し得ない状態が、永くつづいた。これは、訓点資料の研究が、背負っている伝統に起因すると思われる。しかるに、こうした、いわば〈訓点語学史〉といったものが、いまだに出現せず、そうした批判が、理論的になされようとしないのは、奇妙というほかない。こうした視野を持たない限り、訓点資料の研究は、《職人》の技術を誇るほかなくなってしまう。秀れた努力のあとが、それ自体の価値にも拘わらず、ほんの一部を除いては、閉鎖的な独占物と化して、国語学の発展に寄与することが少ない。――ということが、しばしばあった。

この趨勢に、反省の端緒をつけられたのが、遠藤嘉基博士であったが、その真意は、必ずしも、点本研究者に、理解されなかった。だが、直接的な影響か、それとも、時代的な必然かは、知らないけれども、遠藤博士の意図されたところを、具体的に発展させたのが、築島裕氏である。築島氏の研究は、一見、緻密な実証に終始するようであって、しかも、広い視野と深い洞察とに支えられているから、非専攻のぼくらにも、有効な示唆と反省とを与える。訓点資料の研究にも、近代が終わって、現代の黎明が訪れたといえよう。その『訓点語彙の一考察』（国語学第二七集）は数理統計学的な方法をも摂取して、共時論的に取り扱ったものである。研究方法の反省にはじまって、源氏物語との比較による、訓点語特有語彙の語性、異なり語数と使用回数、訓点特有語の特性、およびその語構成が、具体的に解明されている。

これは、更に、通時論的、汎時論的研究と相俟って、原理的研究として完成されるべきであろうし、仮名文学語についても、同じような究明が、なされなければなるまい。そうして、それら相互の位置づけと相互関係が、明瞭になったときに、ぼくたちは、歴史的研究を完成することができる。新しい研究領域の定礎となるに相違ない。

研究が、こうした領域を開拓するにつれて、方法論の探求とともに、資料の整備が、緊要となって来た。この年には、源氏物語、紫式部日記、更級日記の総索引が出版され、訓点資料には小林芳規氏の『東大寺図書館蔵法華義疏紙背和訓索引』や、築島裕氏の『法華経音訓和訓索引』などが、公刊されたが、まだまだ、〈九牛の一毛〉に過ぎない。ひとつの索引は、時として、百

の論文よりも、学界に貢献する。引きつづいて、多くの総索引が、公開されることを望む。索引を作ることは、単なる機械的な技術ではない。たとえば、見出し語をどうするかということに限っても、語学的な素養と、研究方法についての洞察を、必要とするのである。徹底した良心的配慮から、索引原稿を、筐底に秘めているひとの噂も聞くが、これに、完全性を求めることは、なかなか困難だし、それに、索引の効用にも、おのずから、限界がある。更に、多少の欠陥があっても、索引のあるのは、ないよりも、遙かにマシである。源氏物語において見られるように、ひとつの索引があれば、それでよいといったものでもない。異った立場や方法によるものが、幾つかあってもよいわけだから、不完全なものは、批判して、訂正して行けばよい。たとえ〈未定稿〉であっても、できるだけ、公表してほしいものである。公正な批判と、適切な助言とは、学界が、事大思想から解放されて、近代化されない限り、実現し難いものがある。だが、そうした気運は、次第に熟しているように思われる。たとえば、先日も、学生から、〈先生のおっしゃることが、正しいのかどうか、わたしたちには、まだ、わかりません。〉と、率直に逆襲されて、〈マサニ、ソノトオリ！〉と苦笑したが、こうしたことは、ぼくたちの学生時代には、絶えて、見られなかったことである。

文献の解読については、雑誌『訓点語と訓点資料』が、著実な成果を、掲載している。浜田敦氏の『日本風土記山歌註解』（京都大学文学部五十周年記念論集）は、新しい資料というわけではないけれども、ここに、はじめて、厳密な解読本文を得たわけである。

その新陳代謝を、原理的に検討しようとする、寿岳章子女史の『擬声語の変化』（西京大学学術報告人文第七号）、類音類義語を、具体的に明示し、その混同される型を、解明しようとする武部良明氏の『類音類義語について』（国文学研究第一三号）は、風間力三氏の『副詞の構造――語彙論試論――』（文芸研究第二二号）、中村洋子氏と関谷暁子氏との『造語上からみた名詞の研究――源氏物語における――』（日本文学第七号）などとともに、従来、とかく看過されていた分野を、掘りさげようとしたものである。その扱い方については、まだ、問題を残しているけれども、杉本つとむ氏の『女房詞の系譜』（国文学研究第一四号）とか、木下正俊氏の『上代敬語成立考』（万葉第一九号）とかなどをも含めて、新見が認められるし、これからの研究に、資料を提供することにもなろう。

言語の意味が、どんなものであり、どういうふうに把握すべきであるか、――外国では、いろいろ考究されているらしいけれども、国語学界では、あまり、深刻かつ切実には、追求されていないように思われる。意味論が、科学的な方法論を確立しない限り、意味の探求は、どうしても、主観的であることを免れない。これは、国語学や国文学が、国学の昔から、該博な知識に基づく〈読みの深さ〉といった、いわば、一種の名人芸に依存して、言語の理解をして来た、久しい伝統を、完全には、脱しきっていないところに、大きな理由があろう。古典の解釈に当たっても、対応する適切な現代語を、発見することであるというふうな傾向は、いまだに、払拭されない。

だが、理論的な反省は、まだ、現われないけれども、実践的な模索を通じて、新しい方法を獲得しようとする営みは、最近、特に顕著である。考古学の成果に依拠し、民俗学や方言学にも配慮する井手至氏の『「しののめ・いなのめ」攷――原始的住居と「め」――』（万葉第二〇号）は、鮮やかな処理を見せる。言語を支える人間の生活様式から、言語の意味を把握しようとするのである。こうした歴史的、社会的背景からの認識は、今後、開拓されねばならないし、また、著しい成果を挙げるに相違あるまい。

ただ、方法論的に、こうしたやり方には、ひとつの危惧を伴う。かつて、中国語学者の竹内実君が、ぼくにいったことだが、若干敷衍して述べると、考古学や民俗学に依拠して、学界を、一歩、前進させることはできる。だが、たとえば、戦争中の万葉研究が、やはり、神話学や民俗学、さては、歴史学に依拠して、それ以前の万葉学を発展させたが、結局、恐ろしい堕落をしたことを、想起してみよう。その理由を検討してみると、民俗学や歴史学の《成果》だけを摂取して、それらの学問の内部構造、すなわち、方法そのものと対決しなかったからではないか。それらの方法と対決する方法自体が、戦争中の万葉研究には欠けていた。そこで、そうした無方法的な真空地帯に、神がかり的なものの、入り込む必然性があったのである。だから、戦争中の歴史学が崩壊すると、万葉研究も、ガラガラッと、崩れてしまった。歴史学者は、その責任をとったけれども、万葉学者は、呆然と虚脱したままであった。はじめから、寄生していて、責任のとりようが、なかった。換言すれば、そういう万葉研究は、学問としての主体性を持っていなかったのである。多少とも、それらの学問の成立する歴史的要素、従って、それが、内部的に持つ方法そのものを、問題にしておれば、こんなダラシノナイ結果には、ならなかったはずである。まず、自己の方法と、摂取しようとする学問の方法とを対決させ、しかる後に、その成果を取り入れるのでなければ、その研究は、従属物となるほかない。

井手氏の研究が、そうした欠陥を露呈しているというのではない。しかし、いまいった方法論的反省が、どれだけなされているのか、ぼくには、汲みとれないのである。だから、この扱い方が、どんな意味を持ち、どれだけの範囲に適用できるのか、――恐らく、すべての語について適用し得るはずは、あるまいが――方法としての意義が、明らかでない。この点に関して、理論的な裏づけを、示してほしいと思う。

語の意味を、生態的に検討した論考は、数において夥しい。しかし、立場と方法とに対する反省を欠くから、その多くは、見解の相違に終わる虞れがある。卜伝の〈無手勝流〉は、刀術を極めたもの、これは、刀術以前の無手勝流である。かれは、刀術を克服できる天才であり、これは、刀術を克服できるつもりにはなれても、真剣勝負では、血煙りをあげて倒されてしまう。ただ、幸いなことに、国語学界では、真剣勝負に擬せられる論争の、成立することは、概して、皆無に等しいし、これでは、負けても、負けたという、自覚を持てないだろう。敗北の自覚のないところに、敗北は存在しない、――といったふうな、中世的観念論の俘虜となっているのが、学界の大勢ではないか。昔、剣の道場で、竹刀で打たれるたびに、〈カスッタ〉とか、〈モウイッスン〉と

か、負け惜しみを吐いた男のことを、まざまざと想い出す。負け惜しみと自覚すれば、まだ、救われるけれど、正気で信じているのなら、全然、話にならない。

そこで、ここには、青島徹氏の『「いづら」の語義語法』（国語と国文学第三八六号）と、雑誌『国語国文』に連載されている、遠藤嘉基博士の『新講和泉式部日記』とに、触れるに止どめたい。

青島氏の研究は、従来、それぞれの文意に適応する、いわば機能的な意味を、考究することにのみ趨る傾向のあった語義の探究を、統括的な観点から、把握しようとするものである。語義の考察が、初歩的乃至啓蒙的な解釈の手段として、機能的に把握されて来た理由は、わからないでもないが、そこに停滞する限り、それは、技術的な処理であることを免れない。ともすれば、あまりにも浮動性を帯びて、方法よりは、《人間》に依存する、名工あるいは素人の、逸品もしくは駄作となってしまう。分析あるいは分類できる意味の多様性にも拘わらず、それが、ひとつの語で表わされているところに、その語の本質的な意義が、あるはずである。とすれば、語の本義――青島氏は、《原義》といわれるが、これは、発生論的見地に立つ場合に、用いるのが、適切であろう。生態論的立場からは、これと区別して、ぼくは、《本義》と呼びたい――を、究明することが、学的に、語の意味を把握することでなければならない。いわゆる《転義》は、本義を解明するために、設定される虚像でしかないのである。

この本義を把むために、青島氏は、造語法と用法とから、豊富な用例を引いて、検討しておられる。用法の分類は、《場面》から《場》を解明することでなされているが、この点に関しては、方法的に、疑念を狭む余地があろう。〈多分に主観的な偏好の情に左右される〉ことは、自認しておられるが、それにしても、〈期待が外れた場合〉とか〈事の意外に驚く場合〉とかの、項の立て方の妥当性を、解説して貰わなければ、積極的に否認され難いとしても、説得力に欠けると思う。こうした主観的な心理は、表現を成立させる条件だが、客観的な条件と違って、ぼくたちは、言語の認識に立脚して理解するよりほかはない。――特に、古典の場合は、そうである。無論、主観的な心理を仮りに設定して、それに矛盾なく言語が理解できることから、この仮設の妥当性を確認することもできる。次に触れる遠藤博士の解釈は、まさにそれである。だが、この方法は、現代と過去とが、共通の心理に立脚することを、前提としなければならない。そして、それは、多くの場合、矛盾を生じないといえようが、方法論的には、歴史的社会的条件による媒介を経ないと、過去を、一種の永遠の現在において把握する、危険性を胎む。すなわち、心理的な設定から言語を認識する場合には、歴史的社会的条件による検算が必要であり、この《ダメ押シ》を欠けば、方法としての欠陥を免れない。

また、こういう分類は、品詞分類のような原理的なそれと違って、分類原理に対する考察に、厳密性を要求されない。ぼくは、こんな類別を、《分類》とは区別して、《区分》と呼びたいのだが、それだけに、それぞれの項の立てられる必然性は、おのおのについて、徹底的に検討されねばなるまい。たとえば、ひとつの

流れが、保津川、大井川、桂川と区分されるには、それぞれを支える地形のほかに、それらを廻ぐる生活の伝統と歴史とからする必然性が、あったわけである。なぜ、立てられるのが、その項でなければならず、他の項であってはいけないのか。どうして、それらの項が立てられるのか。——そうした解説が望ましく、そこで、はじめて、このやり方が、方法として、客観的な妥当性をもつ。

和泉式部日記は、遠藤博士が、京都大学で、久しく講じられたものである。ぼくも、その何回めかの講筵に列して、指導されたひとりであるが、回を改めるごとに、新しい見解で、補訂を試みられたという。この新講は、単なる註釈の類と異って、遠藤博士の考え方を、具体的に示しているから、博士の方法を理解するうえで、有意義である。

これには、二つの特色がある。ひとつは、言語の展開を支えるものとして、心理の展開を設定する。そして、心理的展開を探ることによって、表現を理解しようとする。ところで、心理的な起伏の、A—B—C—D……という展開は、必ずしも、表現A′—B′—C′—D′……という展開を伴わない。時には、A′—C′—D′……となることがある、——否、それが、むしろ、普通といえよう。そこで、A—A′、C—C′、D—D′の対応関係から、Bに対応するはずのB′を想定して、A—B—Cの展開に対応するA′—B′—C′を把握することができる。いわば、心理主義的な立場といえよう。ただ、その方法が、内省法によるために、深い古典的教養に支えられる場合には、結果的に成功する——これは、〈読みの深さ〉を強調された吉沢義則博士の場合も同じで、後継者である遠藤博士も、それを、根柢的には、継承しておられるわけである——としても、近代的な方法としては、科学的な客観性を、必ずしも獲得しないことがある。すなわち、その方法が、《学識》を混淆するために、一面では、科学的な方法の樹立を目指しつつも、他面では、名人芸的な要素を残しているといえよう。ここに、この方法は、新しい意義と、更に、発展させられねばならない課題とを具備する。

心理主義的な立物に拠る内省法は、必ずしも、遠藤博士の創始とは、いえないかも知れぬ。しかし、それまでは、解釈の技術として用いられ、主観的な鑑賞を支えるものとして、利用されることが多かった。したがって、それは、科学的な追求からの回避でもあった。遠藤博士に至って、その解釈を一貫して支える、学的な方法として、精錬されたわけである。個人的な技術を、科学的な方法にまで、高めようとされたのは、遠藤博士の功績である。

これに関連して、言語表現を、立体的に把握しようとされたことがある。一体、言語は、時間を軸として展開する。しかるに、言語の対象となる素材は、空間と時間とに支えられている。したがって、言語は、時間的に展開するけれども、それは、時間と空間とが、時間のうえに投影されているに過ぎない。そこで、たとえば、空間的に広がる素材は、この投影図から、復原しなければならない。すなわち、時間的な展開のうえに、空間的な広がりを、発掘しなければならない。古典における、《歌と地の文との融合》《文脈の折れまがり》《ポーズ》《イントネーション》《ひびきあい》などは、こうした観点から、浮彫にされたものである。これらの事実のあるものは、たとえば北村季吟のごとく、江

戸期の国学者が、気づいていた。しかし、それが、いわば苦しまぎれの処置であったために、時には脱文を想定するというふうな、エセ合理に陥ることが、一般であった。それが、遠藤博士に至って、立場と方法との自覚に立脚して把握され、解釈法として具体的に提示されるようになったわけである。かつて、その一部について、批判を試みたひとがあったけれども、こうした立場と方法とに対する配慮を欠いていたために、批判にならなかった。解釈が、熟練と直感とに依存してなされるときには、それでよいかも知れないが、科学的な方法を志向して、そのうえになされる場合には、そうした根柢を衝くものでなければ、批判は、意味をなさないのである。

問題は、別のところでも述べたように、方法として、過去を現在化する惧れのある内省法を採用しているところにある。言語の本質からして、心理主義的な立場をとることは、極めて妥当といえようが、その《心理》を、どう把握するかということになると、内省法が、そのすべてではない。究極において、内省法を免れぬことは、解釈が、これも究極において、一種の名人芸を必要とすることとともに、承認せざるを得ないであろう。だが、その内省が、何を前提とし、どんなふうになされるべきかという問題は、まだ、今後に残されている。

今年も、まだ、引きつづいて、連載されているものであり、軽率に批判できないけれども、いままでに公表されたものについて、整理する意味から、ひとまず、述べた。具体的な作品の講義で、理論的な原理として展開されていないせいか、とかく、真に意図されるところが、正しく理解されていないと思しいので、ぼくの見解を披瀝して、批判を乞うわけである。

あとがき

〈総記〉〈文法〉〈語彙〉〈意味〉と、展望を試みて、今更ながら、ぼくの不適格性を、身にしみて感じる。勝手な批判を、オコガマシクも、逞しゅうしたが、果して、妥当な理解に立脚しているのか、甚だ心もとない。まして、〈ソウイウオマエの研究ハ、イッタイ、ドウナンダ。〉といわれれば、黙して赤面するだけである。西洋では、〈良い酒は酢にはならぬ〉という――〈悪い酒が酢になる〉だったかも知れない――そうだが、この展望は、ぼくの、粗酒であることを、如実に証明しよう。研究者を、《評論家タイプ》と、《独断家タイプ》とに分けるとき、ぼくは、前者に属すると、看做すひとがある。しかし、そうでないことは、《批判するもののため》の展望しか書けず、《批判されるもののため》のものに及ぼし得ないことでも、明らかであろう。これは、批判的展望の担当者として、その適格性を、半ば欠くといわねばならぬ。不用意に、展望を引きうけて、編集当局には、申しわけのない結果をしか、提供できないことを謝する。だが、一面、この実績で、これからは、書評や展望を、依頼されることもあるまいと思うと、サバサバした気持を、否定することのできないのも、やはり、事実である。

最後に、資料を、恵与または貸与いただいた、福島邦道氏と寿岳章子女史とに、あつく感謝する。

――一九五七・七・一七脱稿。